

大使コラム（2011年5月）

5月、既にリスボンでは夏の日差しも感じられる季節になりました。街路樹のジャカランダの木には青紫色の花が咲き始め、郊外でも虞美人草（ひなげし）の赤い花が目立ってきました。日々感じられる季節の変化は、日本と同様、欧州での生活の楽しみの一つだと思います。

着任以来、各地を訪問し、各界の人々にお会いするよう努めてきましたが、先月上旬には、マデ이라島を訪問しました。リスボンから南西に1000キロ弱、大西洋上のモロッコ沖にあるこの島へは、空路で1時間半ほどかかります。15世紀の初めにポルトガル領となり、新大陸の「発見」後は中継地として栄えました。現在もマデ이라・ワインの産地として、またユネスコの世界自然遺産として欧州の観光客を引きつけ、一人あたり所得では首都圏に次ぐ高い地域になっています。

お会いしたマデ이라州の方々が、政治面で自治権の拡大を強調していたのは印象的でした。自由貿易地域の活用にも力を入れており、日本からの投資や観光客の誘致、さらにマデ이라・ワインの対日輸出増にも期待が表明されました。ちなみにこの酒精強化ワインは英国が最大の輸出先ですが、日本も第6位とのこと。ただし、日本では料理（マデ이라・ソースなど）の材料としての利用が主ですが、本来の食前酒、食後酒として飲んでもらいたいと生産者は希望しています。マデ이라酒はポルト酒とも製造方法が若干異なりますが、年代物はいずれも高品質で、生産量が少ないものの、今後の対日輸出の増加を期待します。

なお、州都フンシャル市と九州の天草市とは姉妹提携を準備中で、本年秋にも協定締結のため天草市長の訪問が検討されています。この伝言をフンシャル市長にお伝えしたところ、先方も大変喜んで下さいました。日葡間で9番目の姉妹都市が誕生すれば、両国関係の新たな発展にも寄与するでしょう。当大使館でも両市間の交流を支援したいと考えています。

本年は4月24日が復活祭の祝日でした。当国では、北部を管轄するカトリック教会の司教区のカテドラル（司教座聖堂）はブラガ市にありますが、22日の聖金曜日の夜、ここで復活祭の行列を見てきました。旧市街の薄暗い街灯の元で、素足の人々が引きずる大十字架が石畳に響く細い道、「振り香炉」の煙の中から担がれて現れ来るキリストの亡骸、黙々と進む行列を見つめる人々。この光景は、しばし現実世界を忘れさせる厳粛なものでした。

25日は、1974年の民主化革命の記念日でした。例年ですと国会で外交団も

呼ばれる式典があるそうですが、本年の国会は解散中で祝賀行事はありませんでした。解散から総選挙まで二月以上もある長い選挙戦ですが、財政再建という深刻な課題を担う新政権を決める選挙です。世論調査では社会党と社会民主党の2大政党の支持率も変動しており、第3党の民衆党の動向も含め、まだ帰趨は見えません。財政支援要請の関係で、EU、IMF、ECBの専門家が当国に来訪し状況の調査を行い、今後の援助方針が議論されようとしています。支援のあり方も、選挙に如何なる影響を与えるか見ていく必要があるでしょう。長丁場の選挙戦もやっと折り返し点ですが、これからも目が離せません。

日本では、東日本大震災の被災者支援や福島原発の問題で、困難な闘いが続いています。当面の難題を乗り越えても、被災地域の復興やエネルギー政策をどうするかなど、重い課題が今後も山積みです。被災者のご苦勞を思い、改めて身を引き締め、大使館の任務を果たすよう努めたいと考えています。

時節柄、皆様にはご自愛のほどをお祈り申し上げます。